

ぼくは、作業の手を休め、百メートル四方の野菜畑を見回した。ケールがまぶしい陽光を浴びて、その葉にみずみずしい張りをみなぎらせていた。しかし、虫の羽音は少しもない。そう、ここは地下三〇三階の人工ファーム、太陽光とみえるのは全て人工光線なのだ。

週に一度、地下住民は半日間地上に出ることを許される。何百年か前、地上で異変が発生し、それ以来人類は地下を活動の拠点としている。残った危険な物質は、科学技術の許す限りすみやかに取り除かれてはいたが、あとのどのくらい経てば元通りの生活を送ることができるようになるのかはわからない。

いくら地下が明るく、空調も整っているとはいえ、やはり地上へ出るとほっとする。限りない空の向こうにまたたく星々、頬をなでる微風、知らない鳥や虫の鳴き声、それらは気分をさわやかに解きほぐしてくれる。仰向けに寝そべりながら、ぼくの考えはいつも同じところへ戻ってきた。

それは自分が一体誰かということだ。年齢は二十歳前後、名前はZF二四七六と呼ばれていた。六年前、地下階層のどこかに倒れているのを見つかり、病院に搬送されたが、それ以前の記憶がない。なぜ、そんなところに倒れていたのだろうか？ 一体どこからやってきたのだろうか？

時々狂おしいほどの懐かしさが胸をよぎり、美少女の姿が目に見え、自分に何か大切な使命があるような気がしてならない。

時は刻々と過ぎていった。しかし、ぼくの過去は一向に明らかにならなかった……。

ある日、構内で事故が起き、皆が右往左往する中で、ぼくは中央のコントロールパネルへ向かい、知らないうちにキーボードを操作していた。どうするとう当てもなく機械を動かすうち、緊急脱出用の通路が開き、閉じこめられた人々は助かった。しかし、皆は喜ぶというより、きよんとした目でぼくを見たのを覚えている。ぼくは単なる肉体労働者ではなく、プログラマとしての特殊技能を持っていることがわかったのだ。

それからほどの職場でも歓迎されるようになった。それをよいことに、ぼくは毎週のように転職を繰り返し、地下一階から最下層まで渡り歩き、記憶から消えた過去の自分を探しつつけた。残念ながら、地下では一向にその手がかりはつかめなかった。

ぼくは地上に住んでいたとでもいうのだろうか？

いや、そんなことがあるはずはない。

自問自答をくり返していた頃、地上にあるのは廃墟だけではないことを知った。全世界に数箇所あって高速鉄道で結ばれている地下都市以外に、赤道上にナノチューブ製の宇宙にのびた巨大な塔が立っていることがわかった。

塔への立ち入りは特殊知識あるいは技能の持ち主以外に許されてはいない。しかし、転職につぐ転職を重ね、コーディング技術も向上していたぼくは、申請一ヶ月にして、塔一〇階での勤務が認められた。

一〇階といっても、対流圏や成層圏をはるかに超えた地上三万キロのかなたにある構造物で、他惑星や他宇宙へのゲートウェイとなるものだ。

そこでは週一度地上へ降りるといふわけにはいかず、息抜きは、ステーションの過去の歴史を展示した博物館へ行くことだった。博物館の一角に宇宙空間を見渡せるドーム型の一室がある。そこは地上に寝ころんだのと同じ開放感を与えてくれた。

星の散りばめられた空を見上げていると、一匹の、白いロボット犬が勢いよく吠えかかってきた。振り払おうとした瞬間、犬は手を離れ、後ろの部屋へかけこんでいく。ぼくはその後を追った。いくつかの部屋を通過すると、目の前に銀白色のドームがあった。犬はそこで止まり、はげしくしっぽを振っている。

記憶が蘇った。ぼくはアル、そう、ここは昔、ぼくのお気に入りの場所だった。子供時代のぼくはこの犬とともにここへ来てよくドアのキーをたたいて遊んでいた。そして、ある日、何かの拍子にドームが開き、あのカプセルが現れたのだ。

ぼくはキーをたたき始めた。ピポツ、あるいはブーという音がする。記憶をたどりながら、そして反応を確かめながら、ぼくは夢中でキーを打った。

ウィーンという音とともにドアが開いた。そこには美少女の石像があった。そして、その横に七年前と同じように、一人の侍女がひかえていた。

侍女は七年前にこう言った。魔法で石像にされた王女を救うには、王女を愛する少年が地上で七年の辛酸をなめた後、王女の頬に接吻しなければならぬ。あなたはそれをやっごらんになりますか？

王女の美しさは目もくらむばかりだった。緑色を帯びた長い黒髪、バラのように赤い頬……ぼくは何も考えず、うなずいた。

七年間の長い苦しみが始まった。そして見事その苦しみに耐え抜いてここに戻ったのだ。

ぼくはゆっくりと王女に近づいた。そして、頬に接吻しようとしてその顔を間近でながめた。しかし、そこではたと立ち止まってしまった。眼の前の少女は確かに美しかった。ふっくらとした頬、優しい目じり、けれども、それはあくまで少女の美しさだった。七年前の少年の日には理想の少女だった。しかし、七年間の地上での生活は、ぼくを少年から青年へと変えていた。青年のぼくにとって、目の前の少女は結婚するには幼すぎた。

そのとき、物問いたげに見つめる侍女の視線を感じとった。彼女も同じだけ王女に仕える日々を送っていたのだ。七年前の彼女は王女の遊び相手選ばれた少女とはいえ、正直なところその美しさは王女に比べかなり見劣りした。しかし、七年の時は彼女を少女から乙女にし、今や隠しても隠しきれない青春の躍動がその内面からあふれ出ていた。そう、彼女はぼくと同じだけの時を、ぼくと同じだけの苦労を背負って生きてきたのだ。

ぼくは王女に接吻するのをやめ、侍女に歩みよっていた。

「お名前を聞かせてください」

「べ、ベルスと申します」

「よろしければ結婚してもらえませんか？」

「でも、王女様が……」

彼女はそう言って、頬を染めた。

「王女には、きつと未来にまた求婚者が現れますよ」

そういうと、ぼくはその赤らんだ頬にそっと接吻していた。